

若い衆カモーン!

…技術もヒトもつながるように…

丹後有機の3人衆の巻(丹後有機産直センター:京都府与謝郡)

天の羽衣・浦島太郎・大江山の酒呑童子、神話や伝説がいまも残る古き歴史ある丹後半島。丹後有機産直センター代表の丸岡文雄さんのもとに多くの若者が集まっています。

帰ってきたゾ

中川秀雄さん 29歳



中川さんのご両親は農家。「農業は、シンドイし、儲からんし、絶対やらん」と思っていた中川さんですが、サラリーマンだった頃に友人が開いたお店を手伝い料理を作るうちに、食べ物を扱う仕事への興味がどんどん膨らみました。そして、食べ物のいちばんの素である作物へと想いは回帰します。「家に帰り農業をやっていこう」と決心し、静岡県にある自然農法の研修機関で2年間学んだのち、丹後大宮町

に戻ってきました。24歳、5年前のことです。「勉強して帰ってきたばかりの頃は、親とは結構やりあったかなあ。2年目、3年目と収量が安定するようになってくると、おまえのやり方でやったらええ、と今では何も言わなくなった」。2年間学んだとはいえ、今でもこの地域にあった栽培方法を模索中とのこと。

そんな中川さん、現在はピーマンと万願寺とうがらしを出荷しています。

「ここ大宮町は、加工用農産物が多いから地元で作ったものが外へ出ていってしまう。人も都心に働きに行ってしまうから、作物も人も過疎状態と言っている。高齢化も進んでる。でもそういうのはちょっと違うと思うんや。年をと

ってもできる農業、外に働きに行かなくても、地元で雇用があるような農業を目指したい。そうして作る人と食べる人がもっと密着した、グリーンツーリズム的な、なんていうか農業を町の基幹産業にしたいんや」。

現在、延利村づくり委員長。自分の農業だけじゃない、地域の農業にも熱い想いを抱いて奮闘中です。



「今回のピーマンの出来は結構いいよ。大きいし、甘味もあるよ」

ひとりできたゾ

水田裕之さん 33歳



水田さんは、岩手県の農業高校の先生でした。5年前「牛を飼い、野菜を育てる有畜複合の農業をしたくて」新規就農の口を探します。いくつかの県に問合せ、京都府農業会議から紹介されたそうです。

「行政の紹介で新規就農したから、おおごとみたいでね。牛舎を見にきたりとても親切に指導しにきてくれて…」

当初10頭の牛を飼いましたが、ひとりでこなすには課題が多く、現在は青果の栽培のみです。山を切り崩した国営の畑を3反借り、トマト、かぼちゃ、ズッキーニ、さつまいも、じゃがいもなどを作っています。この辺りの国営畑はたばこ栽培が多く、水田さんはその後を借りてしまったことがあり土作りがしにくく、畑として納得のいかないものでした。今年、開墾したばかりの畑。ですが、思っていたよりも土地が痩せていて肥料不足になってしまったそうです。

隣の畑の葉が青々と茂っているのを指して、「あれは指導員のいうと」



「この土はミネラルはあるからな、あとはなあ、とアドバイスしてくれる丸岡文雄代表」